

漢詩神奈川

第15号

神奈川県漢詩連盟
事務局

横浜市栄区笠間
5-3-2-103

TEL-FAX
045-895-2662

発行人 岡崎 満義
編集人 桜庭 慎吾

「漢詩で遊ぶ」たしかな手応え

平成二十五年を総括し、二十六年を展望する

会長 岡崎 満義

神奈川県漢詩連盟の活動はお世辞でなく日本一です、と石川忠久・全漢詩連会長は太鼓印を押してください。ことあるごとに「これぞ神奈川の新様式」と誉めてください。それに力を得てさらにチエをしぼることになるのだが、それもこれも故・中山清前会長時代に始まった毎年春六回の「初心者入門講座」の成功継続がおもとなになっていると思う。

書道や詩吟のグループのリーダーの方々、自詠自書や自詠自吟のための漢詩作りをすすめてもらう。毎年一月には神奈川新聞をはじめ、全国紙(朝・毎・読・日経・産経)の湘南版に入門講座開催のお知らせを掲載してもらうべく、支局回りをする。そういうPR作戦が功を奏して、毎年三十〜四十人の“新人”が勉強を始める。授業も、“寺子屋方式”という小グループ対話方式が定着し、大いに効果が上がっている。

入門講座が終われば新サークルを結成、アドバイザーが一〜二名ついて二ヶ月に一回の勉強会が始まる。今年は七期生の七歩会が出来た。これらのサークルから選ばれた運営委員たちの知恵とエネルギーが神漢連をさらに活性化してくれた。企画力・実行力のある人たちだ。

春秋の研修会、吟行会に加えて、一昨年からサークル交流会が始まり、第一回は窪寺貫道先生を招いて、漢詩上達法の講義をしていただいた。その総括反省会で名講義を受動的に聞くだけでなく、生徒の側からも発言できるように双方向的な交流会ができないか、と検討が始まり、昨年「バトル漢詩甲子園」という発展的なサークル交流会が実現した。各サークルから二首提出、その良し悪しをめぐって甲論乙駁する「バトル」を各サークルから一名ずつ送り出し、壇上で意見を闘わせたあと、窪寺先生に批評

判定してもらおう、というスタイルを編み出した。漢詩作りを始めて間もないバトルも事前にしっかりと勉強し、さらにはサークルで討議を重ねた上で発表するので、議論がよく噛みあい、内容も深く、聴衆にも大いに参考になる。少しお酒の入る懇親会では提出詩の吟詠もあり、なごやかなうちに充実感を味わうことができた。その詳細は「全漢詩連会報」四十一号にレポートされている。「漢詩で遊ぶ」「漢詩を楽しむ」具体的なスタイルを発見したと思う。遠く平安時代に「鬪詩」という催し物があつたというから、偶然そういう伝統にもかすかに繋がっていることも分かつて一層喜びが増した。

このように初心者講座を基盤にして多彩な活動が増えてきたことはうれしいことだが、一方でサークルに属していない“古参”の会員も参加できる場が、研修会や吟行会以外にできないか、という声が上がってきた。そして秋から始まったのが「漢詩鑑賞会A」(玉井講師・瀧川幹事)と「漢詩鑑賞会B」(住田講師・池上幹事)で唐詩選を中心に勉強を進めることになった。

ここではつきりしたことは「神漢連は漢詩を作る人だけの集まりではない。漢詩鑑賞の好きな人、吟や書を通して漢詩を愛好する人にも開かれている組織だ。ホームページを通して神奈川県以外の地域から参加したいという人があれば、それも勿論OKのオープン・マインドが神漢連」ということである。神漢連の性格が明確になった。

二〇一二年四月から開いた我がホームページは、十三年春からは音声や動画も入り、一層親しみやすく、精彩あるものとなった。三上、三村、飯島、川上、吉岡さんたちの技術力、企画取材編集力のおかげである。田原副会長や國田公義さんの素敵な絵があり、室橋さんの中国語による漢詩朗読もありと、バラエティに富んだ内容になっている。ぜひホームページにアクセスしてほしい。

もう一つ特筆すべきことは、副会長の水城まゆみさんが十月から新百合ヶ丘の産経学園で漢詩入門講座の講師となったことだ。二年前理事の古田光子さんが朝日カルチャーセンター湘南で漢詩入門講座を開講したのにつぐ、二つめの「漢詩橋頭堡」ができたことになる。うれしい快挙！ここにも、数年前に中山清前会長が朝日カルチャーセンター湘南で漢詩入門講座を立ち上げた伝統が脈々と引き継がれていることを実感する。ありがたい「地の塩」である。

私が神奈川新聞に月一回第一日曜日の文化欄に連載している「漢詩への誘い」は、二〇一二年四月に第五日曜日に掲載という条件で始まったが、「わりと評判がいいので、第一日曜日に昇格します」ということになった。ある書道のクラブの古橋さんという方から「掲載詩を書いて書道展に出品したい」と電話をもらったこともある。

山中伸彌博士見授諸貝爾醫學生理學賞
珍異細胞研究成 神域ノ細胞可憐ナイノチ
身化千萬悟空精 孫悟空モビックリノ技
學僧風貌爽論述 ジャマナカ三藏法師ノ微笑
恰似閑觀水月明 水ニウツツタ月ノヨウ

この詩の二句を立派な掛軸にして、群青会書道展に出品されていた。

先日、神奈川新聞の青木幸恵文化部長から「四月から紙面刷新するので、この連載も検討の対象になるかもしれない」とキビシク言われている。この連載も神漢連の大切な窓の一つなので、何とか継続できるように強く頼もうと思っている。

やがて会員の作品集「神奈川清韻」第二集が刊行される。城田・水城さんを中心に何度も編集委員会を開き、作者にアドバイスするところはするという手間をかけて、質の向上を心がけている。第一集は八十八首収録したが、第二集は百三首と増えたのもうれしい。

以上、神漢連の活動は順調に進化してきている。それでもさらに「漢詩で遊ぶ」「漢詩を楽しむ」ためには、会員の皆さんが惜しみなく知恵を出してくださることが不可欠だ。スーパー少子高齢化社会をしっかりと生き抜くためのユニークな組織・神漢連に、多彩多様なアイデアを出してもらい、その活動に積極的に参加してもらいたい、と願っている。

◆サークルへの参加希望の方へ

現在、一期生から七期生までの各サークルおよび吟社岳精会等で二ヶ月毎に勉強会を行っております。

これらのサークルに属していない方で、自分もどこかの会に参加したいとお考えの方は原則として門戸が開かれておりますので、各会の代表者または講師にご相談下さい。各会の開催状況は次の通りです。

- ・金星会(一期生 五人) 偶数月の第二火曜 講師 岡崎、代表 三上
- ・三水会(二期生 十三人) 奇 三水曜 講師 古田、代表 中島
- ・好文会(三期生 十一人) 偶 三木曜 講師 城田・三村、代表 高津
- ・詩游会(四期生 十二人) 偶 三火曜 講師 田原・住田、代表 川上
- ・五友会(五期生 九人) 偶 一木曜 講師 田原・高津、代表 土屋・飯島
- ・以文会(六期生 十五人) 奇 三木曜 講師 桜庭・中島、代表 柴田
- ・七歩会(七期生 十六人) 奇 二木曜 講師 水城・川上、代表 喜多
- ・岳精会(吟社 十八人) 偶 二水曜 講師 城田・三村、代表 家吉・磯邊



【連盟の諸活動報告】

皆さん楽しく活動しています



秋の研修会

城田六郎

平成二十五年度・秋の研修会は、五十名が詩稿を提出され、三グループに分かれて実施された。特に四期生(詩游会)と六期生(以文会)の参加者の多いが目立っている。他グループの奮起を促したい。

前回から三グループに分けたことにより、時間之余裕が出来たので、出席者によるさらなる活発な議論が望まれる。

今回も各グループの上位入賞者のみならず、ラッキーセブン賞、無冠の帝王賞が設けられて、岡崎会長より奨励のための賞品が授与されました。

各グループの二位作品と感想は次の通り。

Aグループ

阿里山曉望

板本健作

森羅翠黛玉山巔 森羅翠黛 玉山の巔

杳杳雲開欲曙天 杳々の雲開き曙けんと欲するの天

一閃靈光射幽谷 一閃の靈光 幽谷を射し

宿禽飛立逐風旋 宿禽飛び立ち 風を逐って旋る

Bグループ

憩鎌臺報國寺

横溝喜久男

晚秋訪到寺庭頭 晚秋 訪ね到る寺庭の頭

鴨脚亭亭黃葉稠 鴨脚 亭々として黃葉稠し

竹裏茶坊幽寂下 竹裏の茶坊 幽寂の下

淡煙輕颺茗香流 淡煙 輕颺 茗香流る

以前、鎌倉の報國寺を訪ねると青空に聳える銀杏の黄葉に圧倒されました。この見事な景色と幽玄な雰囲気とを漢詩にしました。

初稿は詩游会の教室に提出し、ご指導いただき、推敲を重ねました。研修会において思いもよらぬ高得票をいただきましたが、同意語の懸念が二カ所、ご指摘を受けましたので更に推敲を重ね、より良い作品にしたいと思います。

Cグループ①

聽琴三溪園

柴田 洋

梅雨園中泥已深 梅雨 園中 泥已に深く

紫陽花白綠成陰 紫陽の花白く 綠陰を成す

高堂閑坐喫茶處 高堂に閑坐し 喫茶する処

洗耳琤琤一曲琴 耳を洗う 琤々たる一曲の琴

三溪園での梅雨と紫陽花と琴による演奏は、鬱陶しさを払拭する日本庭園ならではの設定であった。研修会でご指摘の「泥」の表現には検討を要することが残ったが、美しいものを美しく表現する難しさをも味わう。

発足一年の以文会に所属している者であるが、諸先生方のご指導および古田理事から「郷歌」を「琤琤」と添削して戴き感謝申し上げる次第である。

扶桑風韻に窪寺先生が特別賞の「秋日訪山房」の詩について、「倒履二字のみで喜びを表現する故事の使い方を絶賛する。記事を読み、ずつと心に留めていた。

まさに小生の今の気持ちに似ている。寂々寥々として横たわる自然の中に身を投じ作詩すべきと心新たにしている。



Cグループ②

宍道湖秋暁

秋吉邦雄

早晨清渚霧朦朧 早晨 清渚 霧朦朧
 回首東天漸欲紅 首を回らせば東天 漸く紅ならんと欲す
 乍見千舸泛湖上 乍ち見る千舸の湖上に泛ぶを
 漁歌嫋嫋曙光中 漁歌 嫋々 曙光の中

某日宍道湖畔に宿り、翌未明に湖の渚を逍遙した時の情景である。湖畔は清清しかったが朝霧が立ちこめ暗くかすんでいた。が、東の空が徐々に明るくなってきたと思うと、湖上に沢山の小舟が浮んでいて、漁夫がせつせと貝を取っている姿が霧を透かして見えた。そして曙光の中を漁夫の掛け声が恰も漁歌のように響いてきた。そのさまを詩にしてみた。

詩趣薄く平凡な構成になったこともあって、研修会では果たして先生方から貴重なご批評ご指導を頂いた。

曰く、肝心の結句で「嫋嫋」は弱すぎないか。もつと漁夫の動きが欲しい。「早晨、東天紅、曙光」などの「秋曙」に関連する字句が多すぎないか……などであった。

吟行会報告

晩秋の古都鎌倉を散策 高津 有二

第八回吟行会は十一月二十六日、石川岳堂先生にご参加頂き総勢三十四名、古都鎌倉で開催された。前夜の強い風雨で天気が心配さ

れたが、明け方にはすつかり上がり、正に絶好の吟行会日和となった。午前十時に鎌倉駅西口時計台下に集合、参加者には当日の柏梁体の韻字(尤)入りの短冊が手渡されて出発した。今回は鎌倉ガイド協会の二名ガイドの案内で、鶴ヶ丘八幡宮→源頼朝の墓→荏柄天神社の順に散策した。参加者の中に九〇歳を超えたご高齢の方もいたが、高い階段を苦も無く昇られたのは驚きであった。時間の都合で鎌倉宮は希望者のみの参拝として、懇親会場の「論語会館」に戻った。懇親会では、石川先生の即興の詩が披露され、恒例により住田監事が朗詠した。

鎌倉吟行

寒飈過去一天晴
 今日鎌山吟欲行
 菅公古廟源君墓
 偏頼人車探勝成

続いて、柏梁体の発表となったが、今回は短冊に墨書して前面に掲示したので、好評であった。柏梁体については、石川先生から着眼点のユニークな作品等の講評があり、その後参加者全員から作品への思いを述べてもらった。

今回、柏梁体の初体験の方もいて、柏梁体の句作りの苦労話もあったが、中には初参加で石川先生からお褒めの言葉を頂く方もいて、いつものように悲喜こももであった。

また、石川先生からは事務局配付の「鎌倉関連漢詩」の中から幾つかの漢詩を解説して頂き、大変楽しく拝聴することが出来た。石川先生



懇親会で柏梁体を講評される石川先生

から初参加にも拘わらず作品が優秀であるとして紹介された、齋藤 護さん、磯邊邦雄さんから吟行会の感想を頂きました。

◇吟行会に参加して

以文会 齋藤 護

私に与えられた韻字は“丘”、吟行最後のコーラスが源頼朝のお墓、五十三段の丘を登った。文字通り、丘は小高い所と解釈、下三字は“鎌倉丘”とした。しかし、家に帰って辞書を見ると、丘には墓という意味もあると分かって“源家丘”とすればよかつたかと反省した次第です。(五十三段の階段は頼朝が五十三歳で没したことに依るといふ。)

人生七十余年にして、始めて吟行なるものを体験しました。時間にしてたつたの三時間、距離にして二km位の間の、同じ時間と空間を共有して異なる事象を詠み、韻字の制限があるものの約三十余の人が、異なる漢字で見事に異なる表現をしたのには驚きました。

◇初めての吟行会

岳精会 磯邊邦雄

段葛を歩いてきた。何の辺りからか宇津井寛さんと歩いてきた。昨晚の天気は嘘の様。快晴。

◎鶴岡八幡宮・白旗神社・◎頼朝の墓・◎荏柄天神社、(◎は階段有り)宇津井さんは九十

鎌倉吟行会 柏梁体

鎌臺小春鷗盟悠	室橋 幸子
旻天鎌臺鷗盟遊	川上 修己
秋天騷客恣雅游	桜庭 慎吾
天高鎌府集盟鷗	吉池 啓子
群老吟遊似蝸牛	高津 有二
秋深散策會舊儔	三上 光敏
導遊熱辯皆點頭	岡田 泰男
旻天朱殿友皆周	住田 笛雄
闕牆三代鎌府丘	齋藤 護
八百春秋暮雲収	磯邊 邦雄
紺園碧落白雲流	中野 國武
貴苗育育八幡陬	磯野 衛孝
社殿回廊憶愁眸	吉岡 昭夫
葉落廟堂禮自修	柴田 洋
寥寥白楨千古壽	中野 三琴
公子瑩前秋草稠	水城まゆみ
薛蘿自持老杉鉤	玉井 幸久
蘚徑無風裂石榴	田原 健一

一歳との事。階段総てクリヤ、頭が下がります。荏柄天神社まで一緒しました。

私は行程最後の鎌倉宮迄歩きバスで鎌倉東口へ。論語会館迄歩く間、柏梁体の句は何時書くののだ？ 会館に着くや否や、役員先生の短冊を集めているではないですか。(今書かねばならない。)"収"の短冊を頂いている。どうしよう。先ず浮かんだのは、鎌倉時代は八百年(春秋)前、"収"に何の様につながる？ 「八百春秋暮雲収」。懇親会準備の間に提出することが出来た。

吟行会参加出来て良かったです。ご縁に"感謝"。

團團赤柿鳥語柔	香取 和之
鎌臺古刹茂林幽	三村 公二
秋深小池落葉浮	大森 正泰
柿葉晚凄坐來愁	松井 秀人
土窖苔腥自悵惆	秋吉 邦雄
風哭蕭蕭度暮洲	喜多 基
最好意氣幾年秋	湯山徳次郎
重忠熟慮出奇謀	松本 征儀
荒天狂濤弄破舟	宇津井 寛
鎌都秋景筆難投	岡崎 勝郎
論語會館爲詩留	三浦 哲郎
柏梁好韻常難抽	古田 光子
鷗盟聯句好相蒐	石川 忠久
日東牛耳是相州	城田 六郎
句成一盞醉珍羞	瀧川 智志
鎌臺論詩且猷酬	住田 笛雄
詩豪百人醉酒樓	中島 龍一

『七步会』スタート(七期生)

喜多 基

平成二五年度初心者入門講座の第七期卒業生のサークル「七步会」がスタートしました。

参加メンバーは十六人です。短歌、俳句、川柳がポピュラーなこのご時世に、敢えてマイナーな漢詩の作詩に取り組んでみようと思ひ立った稀有な仲間との巡り合いを大切に共にして共に行こうと考えております。七歩ならぬよちよち歩きですが、神漢連の先生方、先輩の皆様方、何卒ご指導賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

七步会スタート時の状況と趣旨は、連絡係ご担当の山岡健郎さんの七期生のメンバーへのお誘い文書によく表現されていますので左記に引用いたします。

* * *

晩秋の候となり、講座でお会いしてから半年近く経ちました。お元気で過ごしてはいかがでしょうか。

その間、補講やフォローアップ研修会と漢詩を学ぶ機会がありました。その折、七期生の会を発足するようにとの指導があり、一〇月二四日研修会に集まったメンバーで発足準備会議を開きました。その後も電話とメールで相互に連絡し、下記の要領で七期生の会をスタートすることといたしました。



七步会発会式の記念撮影

○会の名称

七步会

(魏の曹植の「七步才」の故事にあやかり、七期生会員の詩才の向上を願うての名称です。)

○勉強会の趣旨

ともかく楽しく長続きするよう、和やかをモットーに漢詩を学ぶ。講師は女流の水城先生、温厚な川上先生です。漢詩鑑賞講座も計画しています。作る方はどうも、という向きもご参加ください。例会後、希望者でわいわい懇親会を行います。

漢詩鑑賞会が発足しました

◇漢詩鑑賞会A

漢詩鑑賞会Aは、唐詩を主体に古今の名詩を鑑賞する会です。

昨年10月に、会の運営についての相談会が開かれ、おおむね次の運営方針で開催することになりました。

1. 会場 地球市民かながわプラザ (あーすプラザ) JR本郷台駅歩3分
2. 開催日時 平成26年1月開講 毎月1回 (但し8月12月を除く)

原則として第4木曜日

午後1時15分～3時45分

3. テキスト 漢詩を楽しむ(玉井幸久編) 参考書

・石川忠久編「漢詩鑑賞事典」講談社

・前野直彬注解 唐詩選上中下岩波文庫

講師 玉井幸久

事務局 瀧川智志 久川憲四郎

(045-516-1234 takikawa@tmny.ne.jp)

現在会員33名となっています。ご希望の方にご参加下さい。

◇漢詩鑑賞会B

江戸時代の版本「唐詩選画本」(嵩山房)をテキストに、七絶の鑑賞を行っています。

担当者を輪番で決めていますが、ボランティアを募りますので強制はしません。

・会場および日時

奇数月 第四金曜日 神奈川県公文書館
偶数月 第二月曜日 かながわ労働プラザ

いずれも午後2時～5時

・テキスト 資料のコピーを事前に配布

・講師 コーディネーター 住田笛雄

事務局 池上一利

九月より開始していますが、参加者は毎月十数名です。毎回完結で継続性はありませぬので、これからの参加も可能です。ご希望の方は連絡下さい。

(042-448-1110 kaz150250@gmail.com)

◇初心者入門講座の募集(八期生)

例年通り初心者のための漢詩入門講座を以下の日程で開催します。

漢詩の鑑賞と詩作について、7回の講習を行います。(いずれの日も午後)

四月十日(木)・二十五日(金)、

五月八日(木)・二十三日(金)、

六月五日(木)・十九日(木)、

七月三十一日(木)

(フオーアップ及び卒業式)

受講料二千円

知人友人をご紹介下さい。



今年も開催!

第三回サークル交流会 「バトル漢詩甲子園」

昨年三月に開催された第二回サークル交流会「バトル甲子園」はその後のアンケート結果などをみると極めて好評で、次回も是非この方式で実施してほしいという声が強かった。又、窪寺先生はじめ、役員の方々からも非常に勉強になり、且つ、楽しい会であつたから今年も「バトル甲子園」を実施せよとのご意見を頂いた。そこで、前回同様実行委員会を設け、前大会で指摘された問題点をクリアするよう配慮した左記要領で今年も開催することとなった。

* * *

開催日 三月七日(金)

バトルノ講義 一四時〜一六時五〇分

(神奈川近代文学館大ホール)

懇親会 一七時〜一八時三〇分

(ポートヒル横浜4階)

参加者 八サークルの会員

但し、一般会員の参加も可

詩稿 各サークルの今年最優秀作品

1首ノサークル(互選)

優秀作品を窪寺先生が選考

受賞作品は会長表彰

バトル バトラーを一人ノサークル選出

詩吟 自詠自吟が前提だが、代理も可

時間の関係で最優秀作品のみバトル会場で、他は懇親会会場で

書 今回の提出詩か前回の添削作品の書を懇親会会場に展示

自詠自書が前提だが代理でも可

半切サイズが原則

費用 バトルノ懇親会共に参加 ¥五〇〇〇

バトルのみ参加 ¥二〇〇〇

(「漢詩神奈川」十五号に振込用紙を同封)

* * *

前回は対象詩稿が十四首と多く一つの詩にかけるバトルの時間が少なかつた為十分な議論が出来なかつたことを反省し、又、七期生を加えて八サークルとなつたことなどから、各サークル一首の計八首に対象詩稿の数を絞つた。

又、会場が狭く、スクリーンが小さくて見にくかつたというご指摘に答えて会場を大ホールに変更した。更に、自詠自吟に加えて今回は自詠自書を目標に書の展示も行うこととした。

会報に同封した振込用紙での費用振込みを以て「参加」といたしますのでよろしくご協力の程お願いいたします。(三村記)

第三回「漢詩鑑賞の集い」

一志について 屈原、

そして三島由紀夫

湘清吟詠会および横須賀吟詠会

三上 岳光

十月二十六日、ヴェルク横須賀において約三十名の会員を対象に神漢連会長 岡崎満義先生を講師に迎えて九十分余の講演をしていただいた。

今回の演題は、「志について 屈原、そして三島由紀夫」だ。先ずは「志について」の考え方から、

志には『見えやすい志』と『見えにくい志』とがあることから始まつた。前者の一例は三島由紀夫であり後者の多くは普通の人が抱くもの。

後者の例として、講師が在職時代に全国行脚した時の体験から、岡山県吉井町(元明治村)へ新赴任した巡査、岡本憲治氏の話。氏は着任の歓迎会の席上で居並ぶ專業農家の面々に対して「夏場にホウレンソウを作れ」と主張。その後

も熱心に持論を展開したという。当然、專業農家からは「素人が何をいうか」と反発があつたと

当時 組合長だつた橋本さんから聞いたという。しかし、余りの熱心さに押された形でポツポツ

賛同者が出たのに対し、岡本氏は細かい指示を与えたという。結果は都市向け野菜として大

当りだつた。橋本さんは、後日 岡本さんの話として、「地域が豊かな方が犯罪が少ない。調べた結果、吉井町の 夏場の気象が夏場野菜の生育に適していることが分つた」、その結果だつた

という。これなど『見えにくい志』の発露といえよう。

次に作家・山崎豊子氏(本年九月、逝去。享年八十八)の例。「大地の子」の執筆にあたり、

中国現地への並々ならぬ資料収集に拘わる熱意とエピソードや、その作品への強い志に話がおよんだ。

三島由紀夫氏は、三部作(「英霊の聲」、「憂国」および「十日の菊」)等を通じて作者の持つ戦争責任への思いをつづり、社会が彼の理想と

する方向との乖離が大きくなつてゆく現実に立つての苛立ちと、そして米国の文化人類学者ルース・ベネディクトの「菊と刀」との関係も紹介した上で戦後、米国を中心とする連合国が日本から「武」を取り上げ、さらに「精神」まで取り上げての統治にたいする反発する志の発露は、凄まじい。なお、アメリカナイズドされていく日本で、一番それを具現化したのは長島茂雄氏。氏の両手には右手にバット、左手に民主主義といったところ。天覧試合での「逆転さよならホームラン」の話に至つては受講者の眼がかがやく。

そして、おもむろに手元の資料に入る。最初は屈原の「離騷」の最終章、屈原の気持ちを綴つた古詩。部分とはいつても四十五句の長い詩の紹介。次いで周恩来の七言絶句、一九一七年に日本へ留学する前にその決意を綴つた「大江歌罷」を紹介。結句の「難酬蹈海亦英雄」が印象的だ。そして李陵や司馬遷の志、更に伯夷・叔斉の「采薇の歌」を紹介して講演を終えた。

三回の講演を実施していただき、今後、漢詩鑑賞・創作に意欲を示す会員が増えてくることを期待している。



全日本漢詩連盟のホームページのリニューアルに携わって

川上修己

全日本漢詩連盟のHPがここ数年前から更新されずに全くフリーズされたままになっていくことが問題視されていた。このHPを更新することにになり、神漢連のHPに携わった飯島敏雄氏と私に協力の依頼があり、他に会員の中にパソコンが扱える方が見当たらないために承諾することにした。飯島氏は神漢連を主に担当しているため、私が全漢連を担当することになり、力不足を承知の上で素人ながらHPのリニューアルに携わることになった。

改めて全漢連のHPを検索してみると、プロの方の制作のため中身の濃い、内容豊富にして手の凝った構成になっているのに驚いた。これをリニューアルすることはただ事ではなく躊躇した次第である。しかし神漢連の構成に準ずることで了解を得て、全く最初からHPを作ることにした。HPの作成は初めての経験ではあったが飯島氏の協力を得ると共に、最近では便利なHP作成のツールとして「ホームページビルダー」というソフトが市販されている。これを使用すると理解困難なプログラム言語を解することなく容易にHPを作成することが可能であった。ただしソフトウエアの使用法に習熟するには若干の時間を要したが、試行錯誤を繰り返すこと数ヶ月、昨年十一月に一応のリニューアルが完成した。

旧ホームページは既に閉鎖されているために見ることはできないが、リニューアルされた部分を列挙してみます。まず、トップページの次ページに石川会長の挨拶がはじめて新しくなり、規約も最近変更された文言になっている。都道府県の漢詩連盟の一覧も見られるようになり、各々の連盟の情報も何県か取り入れてある。特にHPを持っている連盟にはリンクしている。全漢連の活動報告は昨春行われた「全日本漢詩連盟十周年記念大会」(三月一九日 於二松学舎大學)の様子を写真と動画とで掲載している。動画は新しい試みである。同様に昨秋行われた第二八回国民文化祭やまなし文芸祭・漢詩(於山梨県韮崎市)の様子も動画付きで掲載している。一度ご覧下さい。

他に新しい試みとして「わたしの好きな漢詩」これは全漢連の理事の方に順繰りをお願いすることになっている。さらに講座・教室・講演会の紹介、漢詩作法・初級者／中級者編、海外情報(中国・韓国)なども順次更新しながら掲載を予定している。今回のリニューアルで一番の問題であった旧HPの多くの重要な情報をいかに残すかということであった。これは飯島敏雄氏の多大なご努力によりすべての情報を整理して「過去の情報」として残すことができた。氏なくしては新HPの作成も公開もあり得なかつたことに重ねて感謝する次第です。平成二五年一月に完成をみています。「全日本漢詩連盟新ホームページ」を検索してご覧いただけます。

【第8回神奈川県漢詩連盟総会】石川 忠久先生講演録 漱石に見る漢字文化の受容 その二 漱石と漢詩

子規は早稲田中学に入った。そこでは漢詩を作る時代で詩の回覧などしている。この人は早熟ですから、一っぱしの漢詩を作っている。それで中途退学をして東京へ出てきた。伯父さんが東京へ出ていて活躍していたと云う事もあったでしょう。だが、早稲田中学は卒業していません。途中で退学している。その頃は中学を卒業していいよといながらうと、勉強が出来て試験さえ通れば良かった。それで東京へ出てきて予備門に入って一年間勉強をして、十六年に出て来て、十七年に漱石と一緒に入っています。そして明治二十二年に二人は知り合い、文を交換している。「七艸集」と云うのを自分で作って漱石に見せる。漢詩、漢文、俳文、和歌など七種類を夫々論じて一冊に綴じた。どうだと漱石に見せた。うーんと思ったのだろうが、これに返答するために「木屑録」が出来た。木屑などと謙遜しているが、漢文で、千葉の房総を旅行して、旅行の日記を漢文で書いて、その漢文の折々に、自分の詩を織り込んで作って、それを子規に見せた。オッ、なかなかやるなと云うことで、お互いひかれたと思う。ここで二人は互いに相手を認めた。子規も自分は相当の者だと自負していたかも知れないが、漱石を認めた

のです。ですから、漱石のことを畏友と云っています。これは最高の友人の表現ですから彼らは学生の頃お互い尊敬しあっていた。片方は儒者、武士の出、片方は町家、普通の出身。松山藩は遠いが松平で、多少気脈が通じたかも知れない。佐幕派と薩長派というのは、昔は大きな距たりがあった。相容れないものがあつた。

そこはいよいよ詩に入ります。明治二十二年に知り合う迄は二人は親しくはなかったのですが、それから子規が死ぬ三十五才迄濃密なつき合いをしています。お互いに相手に影響を与え乍ら。最初は子規の方が兄貴。生まれは子規の方が後ですけど兄貴分だった。それを漱石が素直に認めている処が偉い。何を、と思つて反発するのではなく、年下が兄貴風吹かすのを認めている。彼は子規の俳句の会にも入りました。明治三十五年に子規が亡くなりますが、その頃は留学中だった。

もう一つ面白いのは、その後東大を出てどこへ勤めたか、最初は今の教育大の講師だったが、そのうちに旧制高校の口もあつたのに、松山の子規が出た中学に行きました。これが面白い。丁度松山の中学が英語の先生が欲しかった。本当は外人が欲しかったらしい。小泉八雲も松山

で外人の教師として勤めました。ところがこの頃外人が居なかった。そこで、東大英文科出たてのホヤホヤ、出たのは一人しか居なかった。英文科が出来ての第二回生。そこで彼に声がかかった。子規の出た学校でもあるし、待遇も外人並みと云うことで行きました。校長の給料より高かった。その位厚遇された。沢山ある中学の中で正岡子規の出た中学校へ赴任して、そこで「坊ちゃん」と云う小説が出来たわけだが、ここでは一年足らずだった。それから今度は熊本の高校へ行くわけだが、そうしたことがあつたが、彼が死ぬ前にどういう作品を残していたか、最初の作品を見ましょう。

「鴻台」、これは千葉県にある国府台のことですが、洒落てこう書く。これは漱石が勝手にやっているわけではない。江戸時代から使われています。作つたのは明治十六年頃ではないかと云われているが、そうすると彼がまだ予備門に入るか入らないか、恐らくまだ入らない時です。二松学舎で勉強してこのような詩を作った。何とこの頃、枕雲眠霞山房主人などと自分のことを名乗っていた。若い少年らしい。雲に枕し霞に眠る。若い活気がこのような号にも表れている。

鴻臺 二首 鴻台 二首
 鴻臺冒曉訪禪扉 鴻台 曉を冒して禪扉を訪う
 孤磬沈沈斷續微 孤磬沈沈 斷續して微かなり
 一叩一推人不答 一叩一推 人答えず
 驚鴉繚亂掠門飛 驚鴉繚亂 門を掠めて飛ぶ

朝早く国府台に来てみると、お寺で叩く磬石板の鐘のようなものですが、チーンと鋭い音がする。それが朝断続してかすかに聞えて来る。前半二句で禅寺の様子、転句は賈島の推敲の故事を上手に引用している。すると鴉が驚いてはアーツと飛び乱れて門を掠めて飛んできた。

どうと云う詩ではない。スケッチで、景をうまく捉えている。この作品は若き日の記念すべき作品と思う。これを見ると、ソツなく作つていて、当時の漱石の水準がだいたい分かる。この他にもう一首ある。これは二首のうちの一つ。

もう一つの方も出せば良かったが、そちらには和臭がある。「床」の字を「床しい」と動詞に使っています。これは日本語で、ユカイですね。二つ一緒の時に作つたか、別の時に作つたかはわかりませんが、数少ない少年時代の作品として紹介しました。彼は中国語で作つたわけではないが、中国語で読むと原詩のリズムが分かります。例えば、「繚乱」、頭がラ行のくり返りで、読んだ時に心地良さが出てきます。

さて、次の作品は明治二十二年、もう子規と仲良くなつてからの詩です。

山路觀楓

山路に楓を觀る

石苔沐雨滑難攀 石苔 雨に沐し 滑りて攀じ難し
 渡水穿林往又還 水を渡り林を穿ち往きて又た還る
 處處鹿聲尋不得 処々の鹿声 尋ね得ず
 白雲紅葉滿千山 白雲 紅葉 千山に滿つ

箱根は江戸の人にとっては非常に良い遊び場

所でした。江戸からそう遠くないし、東海道をずーつとたどれば気持ちが良い。それで箱根のことを詠む詩が沢山ありますけれど、この「山路觀楓」も箱根の作品です。石の苔が雨を浴びて沐すは水浴びの意味だが雨水を浴びてつやつやしている。それでつるつるして登り難い。難儀し乍ら登つて行くところから知らぬが鹿が鳴く。白雲、紅葉が山中に満ちている。この作品もどうと云う詩ではないが、一種の彼が後年そこにひたり込む詩画の世界、そのさきがけをなしている。そんな感じがします。彼は晩年大病をして詩が変わってくる。丁度その頃、弟子に中村不折と云う画家が入つて来てその手ほどきで、自分でも絵を書く。それに詩をそえる。自画自賛。こういう世界を彼は後年楽しむことになりましたが、この作品はそのずーつと前のものですがすでにそのようなおがしています。

田城は小田原城です。この詩を見ると、明治二十三年九月は彼が大学の英文科に入った年です。昔は九月入学。予備門を終わつて、その予備門も漱石の在学中に第一高等学校と名前を変えたが、一高の本科を終わつて七月に卒業して、九月から東大、その頃は帝国大学と云つた、その英文科に入った。たった一人だけです。京都にも帝大が出来てからは、東京帝国大学と云うようになりました。その前は一つしかない大学で、帝国大学と称していた。入学したての作で、そういう気分が作品に表れています。どこに出ているか。それは第四句です。「路は帽頭より生ず」これです。始めから見ましょう。

第一句の「崢嶸」(そうこう)と云うのはお尻の揃う重韻語で音声効果がある。山が非常にけわしい。この頃には鳥居枕の「箱根の山は天下の険」と云う歌がもう出来ていますから、それを借りたのかもしれない。

第二句、「廿里」は「ネンリ」と読みます。箱根八里と云うがここでは廿里。

第三句、第四句は対句になる処です。きれいな対句になっています。「雲」と「路」、「鞋底」と

「帽頭」、「従」と「自」、「湧く」と「生ず」。語法的にはきれいに対応していて、「雲は靴底から湧く」と奇抜な云い方をしているがこれは唐詩の影響があります。李白の詩にあります。靴底から雲が湧くと云うことでずーつと高い処へ登つたことを表している。次の「路は帽頭より生ず」

は昔の詩では「馬頭」になつていますが、帽子の先から路が出て来る、と云うのはまだけわしい

函山雜詠

函山雜詠

函嶺勢崢嶸 函嶺勢い崢嶸
 登來廿里程 登り來たる廿里の程
 雲從鞋底湧 雲は鞋底より湧き
 路自帽頭生 路は帽頭より生ず
 孤驛空邊起 孤驛空辺に起ち
 廢關天際橫 廢関天際に横たわる
 停筇時一顧 筇を停めて時に一顧すれば
 蒼靄隔田城 蒼靄田城を隔つ

路が続いていることを云っている。そこで帽子の頭と云っているが、これはそれまで使った人はいない。所謂詩語ではない。これを漱石は知らなかったか、そうではない。大学へ入って角帽を被ったのです。得意満面。そう云う気持ちが一寸出ていると思う。(これはまだ、誰も云った人は居ないのでオフレコです)。昔は大学生はエリートです。今は大学生がザラザラ居るが、角帽を被って路をゆくのはステータス。この頃は大学は一つしかなくて、角帽を被つたら、意気揚揚だ。で、帽子の頭から路がと、こういう句を考えたのです。こういう処が面白い。若氣が出ています。云うか、稚氣満々ではあるが、同時に書生の心意氣が出ています。これは漱石研究家もまだ誰も云っていません。辞書には無い言葉だと云うことは皆分っています。何故、この表現をしたかと云うことについての考察が足りない。

第五句と第六句。箱根の関所は高い処にありますから「空辺に起つ」と云っているが、「空辺」はやや熟さない表現です。「辺」と云うのは具体的な何かがあるから、そのあたりと云うことなのだ。空は相応しくない。この辺は若さが出たかと思えます。第六句はもうすたれた関所、第五句と第六句も対句です。この二つの対句の仕立ての仕方はもうかなり堂に入っていると思う。

最終聯は筈を停めてふり返つて見ると、小田原城が山霞の向こうに見える。箱根らしい作品で良く整っていると思います。無論これは子規

に見せてやろうと思つて。書生時代の詩はまだ他にもありますが、一応この三首で代表させておきます。

ここ迄の処は二松学舎に入つて下地を作つて、そして予備門に入つて正岡子規と知り合つて、その初期の作品という事になります。この頃、子規は段々と病氣が起つて来て、学生の間で咯血しています。子規の号、そのまま。「鳴いて血を吐くホトトギス」ですから。結局大学を中途退学してしまいます。最初哲学科に入つたが国文科に転科し、卒業しないでやめてしまった。そんなわけで違う道を巡りましたが、二人は予備門の時代に出来た厚い友情をずっと持ち続けて、漱石が最初の就職を子規の母校に求めたと云うのもそのあかしの一つだと思つた。

次に「春興」は明治三十一年三月の作ですが、ここに到る迄どうしていたかと云うと、松山中学は一年足らずでやめて、熊本の第五高等学校へ移りました。ここに四年居ります。短い人生の中で四年は長いです。漱石の人生の中で熊本時代は非常に大きな意味を持っています。ここで漢文の先生と親しくなります。長尾雨山と云う人です。本名長尾甲。この人は明治十八・九年に東大が作った古典講習所、付属で古典を勉強させる学校を創つたが、正式な学部ではなかった。修業年限は四年。和書科と漢書科があった。夫々募集したが比較的年を取つた人達が入つた。ここ出身の人です。他に有名な人は佐々木信綱。この人は若かった。年をこま化して入つたらしい。一般的には普通の学生よ

り年上の人が入つた。他に司馬遷の史記の研究家で滝川亀太郎、山田方谷の義理の孫に当たる山田正斎など多士濟々、沢山の優れた人が出たのですが、どう云うわけか、二年間で募集を打ち切つた。ずーっと続けていたら良かったのと思つています。その代わりと云うか、東大の中に漢学科を作つた。漢学科の第一期生に中野道遥と云う詩人が居ます。岩波文庫に詩集があり、買いやすくなつています。中野道遥は宇和島の人です。二期生に大物が出た。狩野直喜。

この人は後に京都大学が出来た時に選ばれて漢文科、今で云えば文学も哲学も含めて責任者として学科を作つた人です。吉川幸次郎さんはこの人の弟子です。狩野さんが定年で辞める直前の若い弟子だった。他に桑原実蔵、桑原武夫のお父さん。歴史家です。東大の方では宇野哲人が少し後に出て来ました。

長尾雨山は先に第五高等学校に行つていて、そこで漱石と親しくなつた。それは彼が若い頃から漢詩の世界にひたり込んでいましたから、五校へ行つたら漢文の先生と親しくしようと思つたのでしよう。長尾雨山は年が三つ上です。三つ上ですが相手はピカピカの大学卒業生で、一目おいています。自分は大学ではない、古典講習所出身ですから、へり下つていたので。実際には年も三つ上だし、漢文の素養も上なので、すから、兄貴風を吹かしても良いと思つた。漱石に対して一目置いていました。漱石の方は逆に相手を尊敬してへり下つて教えを乞うています。こういう処が偉い処です。この「春興」も

長尾雨山が直しもしたし、評も加えています。これは長い古詩です。古詩はなかなか作れません。こう云う古詩が出来ること云うことは、もう相当技倆が身につけていることを示しています。予備門に入つて正岡子規と知り合つて切磋琢磨して実力がついていったのでしよう。絶句、律詩はおろか古詩まで作れるようになったのです。今日は紹介しませんが、彼がいよいよ松山に赴任する時に七言律詩を子規が贈つてくれました。それに対して漱石も返しています。次韻を踏んでです。これも良く知られています。そのような詩のやりとりをしているが、この作品は新しい熊本の地で作つた。

春興 春興 明治三十一年三月

出門多所思 門を出でて思う所多く
 春風吹吾衣 春風吾が衣を吹く
 芳草生車轍 芳草車轍に生じ
 廢道入霞微 廢道霞に入りて微かなり
 停筇而矚目 筇を停めて矚目すれば
 萬象帶晴暉 万象晴暉を帯ぶ
 聽黃鳥宛轉 黃鳥の宛轉たるを聴き
 觀落英紛霏 落英の紛霏たるを觀る
 行盡平蕪遠 行き尽して平蕪遠く
 題詩古寺扉 詩を題す古寺の扉
 孤愁高雲際 孤愁雲際に高く
 大空斷鴻歸 大空 断鴻歸る
 寸心何窈窕 寸心何ぞ窈窕たる
 縹緲忘是非 縹緲として是非を忘る
 三十我欲老 三十我老いと欲し

韶光猶依依 韶光猶お依々たり
 逍遙隨物化 逍遙として物化に随い
 悠然對芬菲 悠然として芬菲に対す

七句目と八句目を見て下さい。普通の五言の場合は、二字と三字となります。ここは一字と四字になっている。この処に才能が出ています。明治二十一年は数えて三十二歳、十五句目で「三十、我老いと欲す」と云つている。まだ若気の風とか、ペダンティックの処もあるが、それなりに力がついていると思う。こういう長い詩は普通の人には出来ません。こう云う詩をカチツと作れると云う事は相当の腕前です。殊に真中辺が大事なのです。長い詩の場合には、真中にもり上がりを持つて来る。そうでないとしまらない。もつと長い詩の場合ほり上がりを幾つも作る。「春興」は春の楽しみ、春の面白味と云う意味です。長い詩は大體四句ずつで寸断される。これが原則です。門を出ると物思いが多いなあ、「思う所」と云うのは「思うこと」と云う意味です。「思う」と云う動詞の上に「所」を置くと名詞になるのです。「信」の上に「所」がつくと「所信」、信ずること、「見る」の上につくと「所見」、これらはもう独立した単語にもなっているが、もとはこの語法から来ています。「所思」と云うと恋人の意味もあります。ここではそうではない。と、春風が衣を吹いて来た。先の箱根の詩にも出て来たが、「廢道」と「芳草」、道辺は廢たれている、その中に生き生きとした芳草。このあたりは白楽天です。彼の出世作に有名な

「草」と云う詩があります。その中で草の生命力を謳っている。これからヒントを得ていると思えます。

次に第二段。この辺りは丁度真中になります。さて、この辺でよかろうと筇を停めてあたりを見まわす。すると、物皆晴れた光を帯びている。題が「春興」ですから、春の生き生きした様子をこのように描いた。そして黄鳥。日本では鶯です。「宛轉」はお尻が揃つていて、「紛霏」は頭が揃つている。重韻語と双声語を組み合わせています。「宛轉」は現代中国語で「ワンダウン」で一寸合わないが、日本語だと「エンテン」で合う。こういう読みは日本語の音読みの方が合います。日本人が今使っている音読みは比較的良く中国の古い音を残しています。現代中国語はどんどん変化して来ていますから、現代中国語の方がむしろ合わない。だから、中国語を勉強していないと漢詩は分からないと云う人が良く居るが、そう云うことはありません。中国語など知らなくて良い。そう云うと一寸語弊があるが、知っていた方が良い処もあるが、中国語をやらなければ分からないということには絶対にありません。訓読でも分かるし、日本人の方が古い音を知っているから、「宛轉」も良く分かるでしょう。「芬菲」の方も「フン」はfの音です。「菲」は「ピ」になっているが、実はf音からの転化です。「紛」につくから「ピ」になっているが、一字だったら「フイ」です。この作品は双声語と重韻語を多用しています。わざとここは規格を外している。一十四、一十四の形にした。

がいるが、星巖はそんな事は百も承知です。わざと使っている。吉野三絶は「存知だ」と思うが機会があつたら「ご紹介したい。吉野三絶に見る日本人の詩の心は面白いですネ。」

さて、元へ戻つて最終の段。「窈窕」(ようちよう)は疊韻語、「縹渺」(ひょうびょう)も疊韻語。「窈窕」は意味がいろいろあるが、ここでは暗いこととです。「穴」カラムリがついています。穴の奥深くの気持ちです。「寸心」は自分の心。心臓が一寸四方ですから、寸心と云う。中国人は物を具体的に表現するのを通常とするので、「心」は心臓の形から来ている。彼らが「心」と云つた時には、心臓のことを考えています。日本人が「寸心」と云つた場合は漠然と抽象的なことを考へるので、心臓と思う人はまあいい。その位の違いがある。具体的な物の形でイメージすると云うのが漢語の特徴の一つです。ここでは日本人として我が寸心と云っている。「縹渺」はずーっと広がっている様子。暗い心が広がって、何が正しいか、何が間違っているのか、所謂世間の価値判断、それをすっかり忘れてしまう。三十歳にして自分は老境、青年の客気ですネ。これ位の年にはこう云うことを云いたいものなのです。ああ俺も年を取ったとか。「韶光」は春の光ですが、「依依」と云うのは古い言葉で詩経に出て来ます。詩経の場合は柳がたれ下っている様子を心ひかれる景色として謳っている。「依依」は心ひかれると云う意味です。今正に春で、春の光が燦々とふりそそいでいて心ひかれる。春であればある程、光が明るければ明るい程、

心は暗くなるのです。この辺のセンチメンタリズムと云うか、若さの一つの面を表している。

最後の二句が二句で独立している。「逍遙」は疊韻語、最後の「芬菲」は双声語です。物の変化のことを物化と云う。これは陶淵明も使っている言葉です。物の変化に従つてアクセクしないで、ゆつたりと、この春の日を楽しもう。ゆつたりと春の美しい花を、「芬菲」と云うのはこの場合花をさしている。長い詩だが、適当に山を設け、音声的効果もちゃんと折り込んで、カチツと作っています。韻は五微の一韻到底です。

さて、これに対して長尾雨山が評を加えています。その評を「ご紹介しましょう。」

高古超迥 非常に格が高い、格調高い

悠然神遠 神は心、心が遠くのびやか、近いは

卑俗、これは駄目

風格夔平 夔平の夔も遠いと云う意味で前句

と意味は同じ、平は分かりやすい

入於晋宋 晋は陶淵明、宋は謝靈運のこと、

二人の域には達している

このように四字句でもって評を加えている。一寸ほめすぎで、逆に云うとお世辞くさい。この作品は難しい言葉は殆んど無い。難しい言葉をわざわざ使うことをしないのも一つの美德です。全体のマトメとして、晋・宋に入ると、評もまことに適格。晋は陶淵明、宋は謝靈運をさしている。或いは謝朓も含んでいるか、昔、唐の前の六朝の頃、晋は三・四世紀と五世紀始め迄。四百二十年迄が晋。その後は宋です。この宋は唐の後の宋とは違います。宋と云う王朝は幾つもあるが、この宋は劉宋です。皇帝の名前が劉なのでそう云います。唐の後の宋は張宋です。皇帝の名前が張なのでそう云います。六朝の方は劉宋です。西暦で云うと陶淵明と謝靈運の頃は四百二十七年、謝靈運は三百八十五年の生まれで、四百三十三年に亡くなっている。大体四〇〇年前後と考えればよい。四〇〇年前後のこういう人達と通っている。これはなかなか良い処をつけています。陶淵明、謝靈運の時代にこう云う風の詩が出来たから、唐の詩につながった。唐の詩のさきがけを成した。この評は漱石の意図をピシヤツとついています。唐詩ではない、流石に先輩詩人、年は三つ年長にすぎないが、もう一家を成していた。作品の意図をちゃんと見抜いています。最後の「晋・宋に入る」これが一番大事な処です。その前の「高古超迥」だの「悠然神遠」だの「風格夔平」だのはお世辞たらたら。併し最後の「晋・宋に入る」はなかなか鋭い批評になっています。長尾雨山と云う人も相

当な人です。

さて、熊本に四年居た。四年は決して短い間ではない。その中で雨山のような人と知り合ひ、又昔の高等学校の雰囲気の中で、三十歳前半を過ぎたと云うことは、漱石のその後の大きなこやしになつていと思う。それから選ばれて英国へ留学します。二年間です。丁度ヴィクトリア朝の最後の頃、彼が英国に居る間にヴィクトリア女王が亡くなって、ロンドンでその葬式を見えています。これは一九〇二年です。明治

で云うと三十五年。彼が帰国する少し前か、女王の葬式を見た丁度その少し前に、盟友子規が死にました。明治三十五年九月でした。漱石が居ない時に死んでいます。彼が英国に留学した事は大きな意味を持っています。どういう意味を持つているかと云うと、彼はここから漢詩を作らなくなる。明治三十三年に留学する迄は作っていた。処が留学してからは、ずーっと作っていない。十年間作らなかつた。明治三十五年十二月にロンドンから帰ってきてからも、明治大学に勤めたり、東大に勤めたりしたが、結局は教職を辞めて、朝日新聞に頼まれて、新聞社つきの作家になった。作品は新聞に載せることで、相当の高給を貰って、自由の身になることを選んだ。これも良く考えて見ると、中々出来ない事です。京都大学はまだ無い。日本でたった一つの大学だった。早稲田、慶應はあつたが、まだ大学ではない。その大学のポストを捨てた。これは出来ない事です。普通だったら飛びつく。二年間も留学もしている。国はそのつもりで留学させているわけです。当然受けなければならぬ教授の職を彼は蹴った。ここに彼の佐幕派としての精神が出ています。何だ、明治政府なんかの延長線上で、文学博士号を拒否した。これも一連のことでしょう。そこで彼は朝日新聞に移った。当時のステータスとしては、ぐつと下がった。今は作家のステータスは高いが、その頃はステータスとしては雲泥の差があつた。それを敢えて選んだ。この辺が偉い処です。彼はそれで結局、明治三十三年から二年間の留学

を経て、そして日本へ帰ってきて、帝大教授の職を断わり、朝日新聞に雇われて小説を書いた。明治四十三年迄ずーっと十年過ごした。ここで生きるか死ぬかの病気をする。それで漢詩を書いた。明治四十八年八月。その前から胃潰瘍で不調でした。胃弱で、しょつ中胃が悪くて、それがとうとう修善寺へ来た時に大病がおこった。その前から調子が悪かつたが、それを押して東京から汽車に乗って出かけて行つたが持たなくて、とうとうそこで床について、そして最後には一時、人事不省で、新聞には危篤、家族を呼ぶと、こういう所迄行つたのです。処が奇跡的に直りました。そして八月、九月そこで過ごした。

この「無題」という詩は明治四十三年の九月二十三日、これはもう東京に帰って病院に居た時に作つたものです。生死の葛藤を経て、フット出来たのです。フット出来た最初の詩ではない。九月始めに幾つか作っていますけれど、これが一番有名なので紹介します。

無題

無題

仰臥人如唾 仰臥して人唾の如く

默然見大空 默然として大空を見る

大空雲不動 大空雲動かず

終日杳相同 終日杳に相い同じ

五言絶句です。さて、もう一つの話をしませう。漱石の漢詩の進歩の順序です。正しい階梯を踏んでいる。先ず七言絶句を作った。その例が最

初の「鴻台」の詩です。子規と知り合つて切磋琢磨して律詩を作った。今日は話しませんでしたが、五言律詩の他に七言律詩も作っている。七絶↓五律↓七律と云うのは全く正しい順序なのです。これが全部出来るようになって一人前で、彼は熊本へ行って、この仕上げをした。だから古詩が出来たのです。これは熊本に行く迄は作り得なかつた。彼はここで長尾雨山という得難い指導者にも会い、新しい天地で新しい詩境を見つめて作っている。ですから、明治三十三年迄の漱石は漢詩の下地がしっかり出来ている。処がそこで、イギリスと云う全く相反する処へ行つた。これが又大きな引き金になっている。東と西の極端です。丁度振り子がぐーつと東へ行って、ぴゅーと放たれた。引かれるのが大きければ大きい程、はね返りも大きい。それがぐーつと元へ戻って、明治四十三年に神様がお前は静岡で病気になるれと云う命令が下つたのでしよう。血を吐いて生きるか死ぬか。そこでぱつと戻つて、もう下地は出来ていましたから、このような見事な詩が出来た。もし前にそういう土台が無かつたら、幾ら漱石でもこういうものは出来なかつたでしょう。この詩はそういう点では一つのモニュメントと云うか、再び漢詩を作る上で一つの大きな階梯を示している。「階梯」正しい段取りです。天の配剤と云うか、滅多に起きないようなことが続いた。留学も今は誰でもするが、当時は本当に選ばれた人しか出来なかつた。文部省からの資金で二年間イギリスへ行つた。その頃のイギリスは丁度ヴィクトリア朝の最後

で爛熟していた時代でした。その新しい世界に放り出された。だからそこで神経衰弱にもなった。「漱石狂ったか」などと云う報道もあつたらしい。その位精神的には痛めつけられた。併し、そこで彼は歯をくいしばって耐えた。その時には詩を作る余裕は無かった。それが森鷗外と違うところだ。森鷗外はすぐ詩を作っている。彼はずーっと行く途中の船旅で、船中日記ですーっと漢詩を作り続けている。そしてドイツに行つたら、ドイツの詩も作っている。全然違います。

森鷗外は五つ年が上ですが(文久二年生まれです)、比較すると興味深いものがある。漱石の場合には全く漢詩が無い。詩どころではなかった。すつかり西の空気に引かれて集中した。イギリスづけになってしまった。私もロンドンへ行つて、漱石が住んでいた家行きました。彼は四回程引越していますが、保存されている処がある。その保存しているのが、何と桜美林大学の卒業生でした。びっくりした。館長として守ってました。漱石の生きていた時代と今のイギリスは違うが、雰囲気は残っていました。私はそこで詩を作つて、その館長氏に渡して来ましたので、行けば架けてあるかも知れません。

びゅーと戻つた漱石が、又漢詩を作り始めるが、これが五言絶句であつた処が又面白い。五言絶句と云うのはこうして出来る。よく五言絶句は言葉が少ないから作り易いと云つて最初にここから入れという人が居るがこれは大間違い。五言絶句から入つたつて絶対にくまなくならない。五言絶句というのは字数が少ない。少ないから

余韻とか、そう云つた味が無いと意味がない。ところが、余韻とか味とかは下手では出来ない。だから、下手の内は五言絶句を作つても駄目と云うことです。いろんな事を勉強した後で、ふと出来るのです。一番良い例が漱石ですネ。病から目がさめてふと出来た。

簡単な詩ですけど背後には李白の詩がある。李白に「敬亭山」と云う詩があります。敬亭山と云う山と向かい合つてじーっと見ているともう鳥も飛び去つた。雲も居なくなつた。じーつと敬亭山と向かい合つていると、人間ではない者との心の交い合いを詠っているユニークな作品です。その敬亭山の詩と交う処があるのです。彼の場合は相手が雲です。仰向けになつて、寝ころがつて、黙っている。おし黙っている。(放送禁止用語か)この大空は先程云つた通り余り使わない言葉であります。この場合は矢張り大空と云いたかつたのでしょうか。大空の反対の極点として、ちいさな自分が居るわけですから、相手がぐーつとひろがつた空。碧空とか蒼空とか云つたのでは気分が出ません。それで「大空」と云つた。雲がじーつと動かない。終日はるかに動かない。ベッドの上に居る本人と、大空の向うにある雲とがじーつと向かい合つていると云う禅の世界に交うものがあるでしょうか。彼は若い頃から禅に興味をひかれて、最初の詩を見て下さい。これは禅寺へ行っています。少年の頃から禅寺を訪ねている。その頃から座禅を組んだりしていたのでしょうか。そしてこの詩の頃には禅の世界と親しくなつて、ですから、こう云

うことがすつと浮ぶのです。韻は「空」と「同」。一東です。

次はその延長線上で「自画に題す」。当時漱石の下には津田青楓、中村不折と云つた若い画家が弟子入りした。当時の日本画家は絵を画くだけでなく詩も作つた。その一番最後の名刺は橋本関雪です。この人は画家としても立派だが、詩も上手です。銀閣寺のそばに関雪の碑が残っている。お出でになられた方もあると思つうが。昔は日本画を描く人は唯絵を描くだけでなく皆詩を作つたり、字も書いた。楊貴妃の妖艶な絵を描いた人ですが、中国を旅行して、向こうでも詩を作つて詩集を出しています。この人などは割りと最近の人で、戦後迄生きていました。このように、若い日本画家が出入りした。この人達も当然漱石の影響を受けたが、漱石も影響を受けた。こういう世界と云うのは、良い世界ですから、影響された。殊に四十歳を過ぎて一段と老境になつて来ましたから(昔は四〇歳過ぎたら何となく老境でした)。しかも大病をした。と云うことで、こういう世界に強く引かれた。そこで絵を描き、詩を作つて、今それらは大分残っているが、その一つです。大正三年の作品です。死ぬ二年前です。

題自畫

自画に題す

起臥乾坤一草亭 起臥す乾坤一草亭
眼中唯有四山青 眼中唯有り四山の青
閑來放鶴長松下 閑來 鶴を放つ 長松の下
又上虚堂讀易經 又虚堂に上りて易経を読む

乾坤と大きく出ました。大きな空の下の小さな庵。その中に自分が居る。周りは青い山々に取り囲まれている。だから絵は山が描いてあり庵がある。すーっと松が生えていて鶴が描いてある。この絵は私も見たことがあるが、庵があつて典型的な南画です。唐の王維が始めた南宗画と云っているが、それがすーっと流れて中国では明の時代に最高潮になったらしい。明清とこう云う世界が広がった。絵描きは絵を描き詩を作った。で、このように結構な題材として、このような絵、山があつて、庵があつて、松が生えていて、鶴がいて、或いは山道が描いてあつて、木樵りが柴を背負つて歩いているとか。或いは滝川が流れていて、水際に舟が浮かべてあつて漁師が居るとか。こういう絵柄が非常に流行したと云うか、良く描かれました。そういう世界を中国では王維の世界と云いましたが、それがすーっと流れた。典型的な山水画です。

さて、これを見ると、どうと云う詩ではないが、一つの世界を描こうとしている作品と見ることが出来るでしょう。「自分の画に題する」と云っている。これはいまだこにあるのか、私も見たことがあるので、誰かに所蔵されていて、展覧に供されることもある作品です。韻は亭・青・経と「青」の韻です。彼はこの世界に強くひかれまして、沢山の作品が生み出されました。

そこでいよいよ最後の作品になります。これは大正五年の作で、死ぬことを予知していたと

思います。何となくそういう予知があつたと思う。大正五年の七月頃から「明暗」と云う小説を書いていた。「明暗」が佳境に入っていたが、小説は毎日毎日書かねばならないが、午前中に書いて、午後は俗気を消すために漢詩を作つたと云っています。毎日七言律詩を作っている。いつ頃から始めたかと云うと、大正五年の八月十四日にこういう詩を作り始めた。

芥川と久米正雄の二人が丁度大正五年に大卒を卒業して欧州旅行をして、先生に手紙を送つた。それに対し先生が返事を出したのが残っています。

それを見ると、午前中は「明暗」を書いて俗了されるから(何しろ「明暗」は「承知」の通俗世間の話です)、そういう世界から洗われるために午後は漢詩を作つたと書いてある。面白いのは芥川と久米が丁度これから世に出ると云う時に漱石が死ぬ。ですから、この二人は漱石の最後の弟子です。これが八月で、漱石は十二月九日に亡くなりました。最後の作品は十一月廿日。この詩が最後の作品です。この日の晩から調子が悪くなって、それでどうとう起き上がれなくなつてしまつた。明治四十三年の時は生き返つたがこの時はもう体力が無かつた。小説の方は書きたためであつた。真面目な人だ。ゆうゆうと書いていたらしくて、十日以上も連載が続きました。大分書きたためであつた。

その最後の作品は又不思議な作品で、七言律詩が大病して最後に出来た。

無題

無題 十一月二十日夜

眞蹤寂寞杳難尋 眞蹤寂寞杳として尋ね難く
欲抱虚懷歩古今 虚懷を抱いて古今に歩まんと欲す
碧水碧山何有我 碧水碧山何ぞ我あらんや
蓋天蓋地は無心 蓋天蓋地是れ無心
依稀暮色月離草 依稀たる暮色月草を離れ
錯落秋聲風在林 錯落たる秋声風林に在り
眼耳雙忘身亦失 眼耳又つながら忘じて身も亦た失し
空中獨唱白雲吟 空中に独り唱う白雲の吟

七言律詩と云うのは中々作りにくいのです。

余程レベルが高くないと云う詩は出来ません。自信作でしょう。今日これを見ると、平仄の間違ひもあり、表現のやや熟していない処もあるが、漱石の五十年の人生を総括する作品と云つて良い。これは本人が意図したことではないのだけれども、見事な漢詩人生の結末です。これは不思議です。これで完結している。これでふと思ひ出すのは杜甫です。杜甫は五十九歳で死にました。杜甫も七七〇年、五十九歳で死を予知した詩を作っています。眞蹤、森羅万象はひっそりと深遠で容易には知り得ない。虚懷、則天去私の心で、古今の道を探ねて生きて来た。頷聯は則天去私を敷衍していると云つています。陶淵明の世界です。楽しみはそれ天の命ずる処、復た何ぞ疑わん、に通ずる。頸聯は自分の人生の終わりを予感した心象風景。依稀、錯落と双声語を並べて寂寞とした様子を強めています。尾聯はサマシイ。エンギの悪い表現です。この翌々日に亡くなりました。

詩識と云つて、詩による予告です。吉川幸次郎の最後の頃の詩にも『杜詩私録』ここ迄出来た、これを泉下の友に見せたい」と云うのがあつて、本当に程なく亡くなられました。劉廷芝の有名な句、「年年歳歳花相似 歳歳年年人不同」もそうです。伯父の宋之間がこの句を

取り上げようと迫つて、断わつたが為に殺されてしまった。詩では不吉なことは云わない方がよい。

さて、漱石は五十歳で亡くなったのですが、二十六歳迄じっくり学びました。その下地があつたからこそ大成したのです。若い時にじっくり

と学ぶことが大切だと思ひます。近頃秋入学の話が出ているが、学ぶ時間を更に削るような方向だったら良くないと思つています。最後の方は少し駆け足になりました。神奈川県連の益々の発展を祈りつつこれで終わります。(住田笛雄記)

漢詩大会に入賞の皆さん おめでとつございませす

◇第二十八回国民文化祭(山梨県)

■ 韮崎市実行委員会会長賞

箱根晩秋

上田 尤子

錦楓樹下梵宮前 錦楓の樹下 梵宮の前
殷殷鐘聲函嶺傳 殷々たる鐘声 函嶺に伝う
無頼西風紅葉盡 無頼の西風に 紅葉尽き
使人最愴晩秋天 人をして最も愴ましむるは 晩秋の天

漢詩大会に出品するにはまだ実力不足と思いつつの応募でしたので、驚きと同時に身の引き締まる思いがしております。

今回の詩は、昨年怪我で二度の入院をした経験が背景にあります。「今まで老いとは無縁と思つていたのに、怪我や病気が突然やってくる。いづれ来るべきときは来るのだ」という思いを、箱根の晩秋に吹く無頼の風に重ね合わせて詠んだものです。

ご指導くださいました窪寺先生、初心者講座以来お世話になりました古田光子先生、また詩友の皆様にご心より御礼もうしあげます。

■ 秀作賞

逢不丹第一回下院選舉 石井彦徳

春山石徑往來頻 春山の石徑 往來頻りなり

是向家郷選舉人 是れ家郷に向こう選挙の人

王使樵蘇促參政 王は樵蘇をして参政を促しむ

爲成樂土得賢臣 樂土を成さんが為に賢臣を得んと

新塔晚景

石川省吾

東都一角渡炊煙 東都の一角 炊煙渡り

巨塔英姿衝碧天 巨塔の英姿 碧天を衝く

日没西山猶反照 日は西山に没して猶 反照

伸長影到總州邊 伸長の影は到る 総州の辺

與棋友遊甲州

瀧川智志

仙境高天錦繡秋 仙境高天 錦繡の秋

溫泉美酒有棋讎 溫泉 美酒 棋讎有り

爛柯坎坎樂三日 爛柯 坎々 楽しむこと三日

遊客白雲相共悠 遊客 白雲 相共に悠たり

■ 入選 (名前のみ)

飯沼一之

櫻庭慎吾

住田 笛雄

高津有二

中島龍一

古田 光子

室橋 幸子

◇全国ふるさと漢詩コンテスト(多久市)

■ 入選

栗雪

城田 六郎

六出霏霏乍作堆 六出霏々乍ち堆を作し

庭隅玉樹白皚皚 庭隅 玉樹 白皚々

寒晨早起有何興 寒晨の早起 何の興かある

一刻千金卯飲杯 一刻千金 卯飲の杯

綠陰樂酒

住田 笛雄

芳醇偕酌綠篁深 芳醇を偕に酌む緑篁の深きに

浙浙薰風促抱琴 浙々たる薰風琴を抱くを促す

青眼思朋愉讌會 青眼にて朋を思い讌會を愉しむ

清談終日七賢心 清談終日 七賢の心

歸郷訪友

高津有二

別後幾年尋友行 別後幾年友を尋ねて行く

一談一笑玉杯傾 一談一笑 玉杯を傾く

昔時酣醉今微醉 昔時酣醉 今微醉

耆耆朱顏故舊情 耆耆 朱顏 故旧の情

会員便り

— 学習 遠遊 近遊 交流 多彩な活動 —



自作の漢詩を吟ずる喜び

池田清二

私たち「岳精会漢詩研究会」は、執行理事城田六郎・運営委員三村公二両先生のご指導のもと、本年一月、詩吟の一流派である岳精流日本吟院の本部にて発足した漢詩作りのグループです。

岳精流宗家横山精真先生は早くから漢詩創作を志し、多くの作品を全国大会や研修会にてご披露下さいます。漢詩を自作しそれを吟ずることは凄いこと、私たちにとても出来ない別世界のこと位に思っていました。

その夢の様なことがこの夏、何と、町の中華料理店の一室で実現したのです。一同まさに感動の極みでした。

これより先、一昨年の十一月、精真先生のお計らいで漢詩作法入門講座が開設されました。神奈川県漢詩連盟より岡崎会長、桜庭事務局長はじめ多くの先生方ご出席のもとで、漢詩の意義や歴史、構成や作り方を分り易く丁寧な解説して下さいました。漢詩は今や「絶滅危惧種」とか、日本語教育や精神修養への貢献など興味深いお話や、韻と平仄の規則に、改めて漢

詩構成の奥深さに触れる度に感動したものでした。その入門講座が終わり、宗家先生の肝煎りで正式に漢詩研究会の発足となりました。

名称は研究会ですが、実質は城田、三村両先生による研修授業で、メンバー（現在十八名）一人一人が詩題に沿って作った漢詩を先生方が丁寧に添削して下さいる形式です。授業は隔月で毎回詩題の宿題が出ます。漢語辞典を片手に「誰にでもできる漢詩の作り方」や平仄便覧と首つ引きで挑戦します。適切な韻が合わなかつたり、国字で使えなかつたりなどして纏らず夢にまで出てくる程です。

然し苦労して曲がりなりにでも出来上がった時の喜びは本当に一入です。今まで見ていてさほど気に留めなかつた花や生きものに愛しさを感じたり、自然の営みに感動を憶えたり致します。又、杜甫や李白をはじめ多くの漢詩人の偉大さに改めて尊敬の念を深めます。

八月の教室の後、両先生と宗家先生も参加をいただき納涼会が開かれました。その際先輩が先刻添削を受けた自作の詩を伴奏なしで吟じ出したのでした。それを皮切りに全員が次々と吟じてゆきました。正に感動でした。皆の前で自作の詩を吟ずると云う思いも寄らなかつた夢の実現でした。



岳精会研修会の自作自詠風景

ビール、酒、紹興酒などの飲み物とギョーザ、ニフレバー炒めなどを頬張りながら暑気払いも最高潮に達すれば、自作の漢詩朗吟も全員が次から次に声高らかに発表。他のお客さんに「声が大きいですけどよろしいですか!」と宴会の許しを請えば、「詩吟をはじめて聞きました」「二緒に聞いていますよ! いいものですね!」と、益々これに拍車がかかりました。

この感動と快感を胸に刻み、これからも漢詩創作に挑戦し続けたいと思うのです。

石川忠久先生と江戸漢詩跡巡り

松井秀人

全漢連設立十周年記念行事の第二弾として十月二十九日、四十九名の参加を得て、バスツアーが実施されました。天候は当初小雨模様で心配されましたが、途中であがり、問題なく無事予定通りの日帰り旅でした。

コースはほぼ前回の三月の時と同じで、湯島聖堂→神田川の聖橋→ニコライ堂→不忍池→上野山下→東京大学裏→六義園→王子→三ノ輪→スカイツリー下→浅草(昼食)→水上バスにて日の出棧橋→芝増上寺→皇居周辺→最終東京駅でした。

事前に配布された旧跡に関わる江戸漢詩小冊子をテキストに、湯島聖堂の創建三百周年(平成二年)の話と自作の詩なども含め、これからコースに沿って、石川先生の名調子の解説がなされました。小冊子に掲載された詩は次の通りです。

- ・湯島・御茶ノ水を詠んだ詩「茗溪二首」尾台榕堂、「昌平橋納涼」野田笛浦。
- ・上野・不忍池を詠んだ詩「三遊東台観花」藤井竹外、「不忍池晚遊」黄遵憲。
- ・王子村を詠んだ詩「遊王子村」安積良斎。
- ・墨江三絶「夜下墨水」服部南郭、「早発深川」平野金華、「月夜三叉口泛舟」高野蘭亭。
- ・墨江を詠んだ詩「隅田川」大正天皇、「墨江懷家」正岡子規、「増上寺所見」小野湖山、「遊靖国社」正岡子規。

石川先生の素晴らしい解説により、秋の江戸情緒の一端に触れることができ、楽しく充実した一日でした。先生、役員、幹事の皆様有難うございました。

私が感心した一首は、江戸漢詩の情緒が感じられる次の詩です。

三遊東臺観花 藤井竹外

錦旛風影認香臺 錦旛 風影 香台を認む

春寺看花三度來 春寺 花を看んとして三度來たる

十日輕陰微雨裏 十日輕陰 微雨の裏

早櫻半謝晚櫻開 早桜 半ば謝して晚桜開く

台湾紀行

板本健作

台北駅の近くの重慶南路に書店街がある。

二月二十七日、台北に着いた私は、孔子廟を見て、この書店街にやって来た。買いたい漢詩の本は、「増廣詩韻集成」(五百四十円)「江帆千里 唐七言絶句賞析」(七百二十円)「令人怦然心動的 唐詩地図」(千二百円)などです。

翌日は、基隆河中流治いを走る平溪線(一日周遊券百九十円)の旅に出かけた。十分瀑布を見て、平溪名物の天燈に、漢詩の上達などたくさん願う事を書いて空高く飛ばした。夜は、士林夜市と台北ランタンフェスティバルを見た。次の日は、新幹線とバスを乗りついで阿里山に行き、森林遊楽区の樹齡数千年の巨木群歩道を散策した。翌日祝山線に乗り、玉山から昇る御来光を見た。祝山のお土産屋では、詩仙李白

の「将進酒」を彫った台湾檜木を買った。その後、嘉義の夏至の日に太陽が天頂に来る北回歸線標塔を見て、鈇泥濁泉で有名な関子嶺温泉に泊った。翌日、北港、新港の媽祖廟を見て、台南市に向かった。歴史と食文化の香りあふれる台湾の古都、台南市は、見るべき史跡がたくさんあった。台湾南部を占領したオランダ軍によって建てられた「赤崁樓」、台湾最古の「孔子廟」台南大媽祖廟とも呼ばれる「大天后宮」鄭成功の記念廟「延平郡王祠」など。また、美食の街と言われるだけあって、老舗の粽専門店の肉粽や海鮮粽はボリュームがありおいしかった。宿泊したホテルのそばの本屋で購入した、「如何閱讀一首詩 VCD付」(八百七十円)は、漢詩三十二首が美しい中国語で朗詠と吟唱がされていて、パソコンのメディアプレイヤーで見て聴くことができた。

その後、新幹線で「新竹」に行き、きらめく光の祭典、台湾ランタンフェスティバルを見て、帰国の途についた。

羽州吟行

横溝 比呂美

六月の詩游会のサークル定例会で、「仲秋の名月を山形県かみのやま温泉で迎え、温泉と月の漢詩を作ろう」と会員の板本さんから提案が有り、その場で吟行が決まった。

九月十九日『仲秋観月』を求め、詩游会員(四期生)八名と、専任講師住田先生と奥様。同行を快諾下さった神漢連の古田先生、三村



羽州吟行会のメンバー・斎藤茂吉記念館前で

先生の一二名が東京駅から山形新幹線に乗車。列車は黄金色の稲穂が美しく波打つ中を分け入るように北上。

最初の下車は、かみのやま温泉駅。この地に生を受けた叙情歌人斎藤茂吉記念館を訪れる。故郷は自然的な聖地で悲傷を癒し、低徊して止まらなかった、という茂吉の医者・歌人としての生き方に触れ、数冊の歌集を買い求める。

そしてタクシーは一路今日の宿『名月荘』へ。遠く近く連なり合う山々に囲まれた閑静な佇まいは月見の宿にふさわしく、植込みの芒は銀色に輝き、中庭を埋め尽くす程大きな萩の木は可憐な紅紫色の花をつけ、渾々たる湯泉と共に我々一行を迎えてくれた。

夜の帷が下りる頃、高殿の大広間で灯りを落として蔵王山頭より昇り来る満月を愛でる。豪華な料理に舌鼓。美酒に酔い、ある人は酒を満たした杯に月を浮かべ、又ある人は露店風呂に月を浮かべて詩を練る。他郷に鷗盟会い集い楼台で三五の月光を浴びる一時は、格別であった。

翌日、山寺へ向かう。健脚組は立石寺へ登頂。私を含めそれなりの者は芭蕉記念館へ。小高い山の頂に到着すると、俳聖松尾芭蕉が美しい自然景観に感動して止まらなかった、山寺全体が眼前に一望。精舎莊嚴を感じながら耳を澄ませば、読経の声も蝉の声も谷を渡る風に乗って聞こえて来そう……。

そして実り多き旅の終わりを、静寂の光景の中で惜しんだ。

鎌倉漢詩会と私

杉森 千枝美

鎌倉漢詩会に参加し始めて十ヶ月になる。私は神漢連の入門講座の六期生で、以文会に所属している。以文会で二ヶ月に一首の詩稿を提出するリズムは、鎌倉漢詩会で毎月二首ずつへと四倍に増加した。期限が切られないと頑張ることができない私には、このペースが有難い。

会は毎月第一と第三の月曜日の午前に、鎌倉駅に近い論語会館で開かれる。いつも集まるのは十四人くらいで、「詩稿は出さず参加するだけ」もありなので、毎回の検討は十首ほど。次回の詩稿を提出し、その日には前回出されたものを

家で予習してきて敲く。「雅のある言葉」や「詩心」から程遠いところにいる私には、平仄のまちがいを見つけたことぐらいしか出来ない。「自分ならこう詠む」というふうな語句の置き換えが出来ようになるのは何年も先のことだろう。

会が終わると七人八人で昼食に行く。以前は居酒屋へ、最近は蕎麦屋へ。これが楽しくて漢詩作りが続けられる。仲間と切磋琢磨する楽しさ、外出して人に会う機会の増加と、漢詩作りで私の生活は様変わりした。

会の中心で、ご指導下さる磯野衛孝さんが九月中旬からご病気でお休みになっているのが心配だ。かつては十二時ぎりぎりまでかかっていた会は十一時過ぎには終り、昼食に繰り出す。磯野さんの存在の大きさを実感している。

平成文人展および日中友好自詠詩書展に参加して

室橋 幸子

◇平成文人展

私には何の展覧会がよくわからないまま、勧められて書作品を出品した。全日本漢詩連盟設立十周年記念の初めての試みという、自詠自書の醍醐味を、とのこと。会期は十月二十日から二十六日、有楽町の東京交通会館ゴールドサロン、五十三名の出品数。

受付に座っていると、參觀された人の中には、何の展覧会かしらと興味があったという方も来ていた。

石川岳堂先生、窪寺先生他多くの世話人のお蔭でユニークな展覧会が盛大に開催され、五時、作品を背にその会場で懇親会が行われた。その席で石川岳堂先生のご挨拶に「文人展を初めて立ち上げたが、以後、幾年かに一度ずつ継続していったらいいのでは」と提案された。今回だけなら決めてかかって、恥もかき捨てのつもりで出品した自分に反省しきりでした。

◇日中友好自詠詩書展

文字通り日本と中国の友好の自詠詩書展。毎年行われていて、今年は日本から桂林へ赴き中国展での開催を終えたという。私は数年休んでいたが、神漢連に入ったことにより声がかかり久しぶりの出品となった。かつてはこの会の訪中団として家族と共に何回も中国での開幕式に参加させて頂いたものでした。こうして来てみると懐かしい顔ぶれが幾人もあり嬉しかった。

東京展開幕式は十二月五日、日中友好会館美術館で。中国側は全部で十七人、日本側は幹部団十二名ほか数十名が参列。両国幹部団の挨拶、テープカットの後会場へ入る。作品は中国側七十七点日本側八十六点。会場内に席上揮毫が準備され両国幹部は腕をふるう。私は主に中国人の揮毫を見ていたが、運筆の速さは自慢らしい。書画協会とあって、水墨画に専念の書家に見惚れた。桂林の景色に梅を書き、隣に富士山と桜を並べて日中友好という。色彩にも拘り讚を書き完成。作品を掲げて皆で鑑賞。のち地下の豫園で懇親会。中国人の名刺が飛び交う。又自慢の喉を披露したり、懇親の和やか

な中であつという間の時間でした。

儒者 安井息軒 岡崎勝郎

この儒者の暦年は寛政十一年(一七九九)の生誕から明治九年(一八七六)没まで七十七年の生涯。じつに幕末動乱の只中を生きた。

文治・仲平(息軒)兄弟は毎朝書物を懐に入れて畑打ちに出かけたという。目鼻立ち整った兄に対し、弟の仲平は背低く色黒、疱瘡の痕が面を被い、更に右眼がつぶれかかっていた。だが左眼は威正しく而も慈に溢れていたという。父は日向飴肥藩校の主管。

仲平二十一歳大阪の儒者の門に通っていた頃、兄が亡くなり一旦飴肥へ帰郷。二十六歳今度は江戸へ出る。昌平黌の儒者古賀侗庵の門に入り、推挙されて昌平坂に通うこと三年、退いて松崎慊堂の塾に入り古注学を専修。文政十年飴肥藩侯の侍読を申し仕り帰郷。三十五歳侯に供して再度江戸へ。三年後に昌平黌の学寮長になる。四十三歳五番町の持ち家に三計塾を起し、この時に郷里から嫁の佐代を迎える。

たまたま飴肥の漁師から召しだされて徒士となつた者が仲平宅に居合わせ、「先生只今のは「新造さまでござりますか」「左様妻で」「ほう、「新造さまは学問をなさりましたか」「いや学問というほどのことは」「してみますと」「新造さまは先生の学問よりも遙かに「見識がござりますわ」「なぜ」「あれほどの器量でおいで、先生に嫁がれましたとは」「仲平は覺えず失笑し

た。これは森鷗外の短編「安井夫人」の勘所となる個所。

嘉永六年米艦浦賀来航の頃、「海防私儀」「蝦夷开拓論」を藩侯に献じ、文久三年六十四歳で昌平黌の儒官となる。寛政時に宋儒以外を異学と監禁した幕府が古学を崇尚する息軒を起用したのは異例のことで、これは彼の学識の並々ならぬ高さを見込んでのことだった。

麹町一丁目半蔵門外の堀端に新たな住居を得て海岳楼と称し、米沢藩の策士雲井龍雄と月見をしたのがこの家の二階である。慶応元年ここで作した律詩、首聯と頷聯。

海嶽樓觀月有感

武藏原上草間月 自草間出草間没
古風賦盡荒冷景 而今鬱爲金銀關

これに雲井が次韻した。同じく律詩で首と頷の二聯のみ記す。

奉次息軒夫子中秋海嶽樓觀月高礎

芝海潮生浪孕月 浪吐浪吞月出没
風意不妬雲四散 海白天碧朗天闕

息軒の儒学に対しての姿勢は徂徠以来の古文辞学の踏襲と、とくに「論語」を本義として「管子」「詩経」「左伝」の三書の注解を対象とした。

これを深く考究することで、国中の藩校や市井の門戸を席捲していた宋儒、すなわち朱熹や明代の陽明の学を後人の説となし、ややもすれば空理空論に墮したと喝破し排斥した。

人は本来天の正氣を享けて生まれ等しく仁義礼智の性を固有している。性善は自明の理で宋儒を学ばずとも「論語」を本義として処上の三書を学ばば自ずから理は解されるとしたのである。彼が撰した「管子纂註」「伝輯釈」は海内必読の書と定評された。

「聖人の道を遡る、必ず漢注唐疏より始むべし」(息軒遺稿より)。

秦時の焚書の難を辛くも免れた旧書の整理補注は漢代から唐代にわたり連綿と続いた。「大学」は抑の原書は「礼記」のうちの「太学学記」の章で後に前漢の礼学者が貴族の子弟教育のために整理独立させ「大学」として纂した、即ち漢注の一つである。読むならこれをと息軒は言う。後代自ら解説を加えた朱熹の「大学章句」は公から刻に入るとなして蔑みしたのである。

明治三年愛弟ともいうべき雲井龍雄の鼻首の報を聞きながら、先に「只願うところは暴虎憑河の勇を慎み区々たる小頓挫にその志を屈することなく」と戒めた、然るに時勢の赴くところいかんともし難きを痛惜したのであろう息軒翁を、湯島聖堂の歴代鴻儒の銘板にその名を標するを見て、私は重ねて慮るのである。



◎お知らせとお願い

◆入会案内

友人・知人にも是非入会をお勧め下さい。

*年会費

一般会員二千円 賛助会員一口一万円

*初心者講座(六頁記事参照)

受講料は二千円ですが、そのまま入会すれば受講料は初年度の年会費となる特典があります。

*問合せ・申込先

・電話・ファックス

045-895-2662(事務局長桜庭宛)

・ホームページ

<http://www.shinkanren.sakura.ne.jp>

・Eメール

shinkanren@email.plala.or.jp

◆年度会費未納の方へ

連盟の諸活動・運営は全て皆様にお納め頂いている会費のみに拠っております。

申し上げますが、年度会費未納の方がまだかなりいらっしゃいます。

当年度及び過年度の会費未納の方には、四月にお送りする総会案内に当該金額を記載した振込用紙を同封しますので、よろしくお願い致します。

◆神奈川清韻第二集発行のお知らせ

冒頭の会長の記事でもお読み頂いた通り、神漢連会員の詩集「神奈川清韻」第二集を四月上旬に発行の予定です。(因みに第一集発行は三年前の平成二十三年四月)

会員全員を対象に募集していますので、今回は投稿されなかった方も次回の参考のため是非御覧頂きたく、また投稿された方は友人・知人に配布して頂くのもよろしいかと思えます。

但し今回は、神漢連の健全財政維持のため、一部五百円にて頒布させて頂きますので、これにつきましてはよろしくご了承のほどお願い申し上げます。

つきましては同封の振込用紙(サークル交流会参加費と同用紙)に希望部数を記載の上、振込み頂きたくお願い致します。

振込入金をもつて受付とさせて頂き、現品は五月総会の開催案内(四月上旬発送予定)に同封してお送り致します。

■訃報 小松日出夫氏 ご逝去

神奈川県漢詩連盟の会員、小松日出夫氏は、八月二十八日逝去されました(享年七十二)。

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

二十六年前半のスケジュールをカレンダーに記入しましょう

●サークル交流会(七頁記事参照)

- ・期 日 三月七日(金)
- ・時 間 午後二時～四時五〇分(バトル・講義)／五時～六時三〇分(懇親会)
- ・場 所 神奈川近代文学館(バトル・講義)／KKRポートヒル横浜(懇親会)
- ・参加申込 本会報に同封した振込用紙にて二月末(入金)まで

☆サークルに在籍されない一般会員の方も奮ってご参加下さい。

●神奈川清韻第二集頒布(二十三頁記事参照)

- ・申 込 本会報に同封した振込用紙にて二月末(入金)まで

●初心者入門講座(六頁記事参照)

- 四月十日(木)開講 知人・友人をご紹介下さい。

●平成二十六年度神奈川県漢詩連盟総会

- ・期 日 五月二十一日(水)
- ・時 間 午後一時～三時五〇分(総会・講演)／四時～六時(懇親会)
- ・場 所 神奈川近代文学館(総会・講演)／KKRポートヒル横浜(懇親会)

☆講演 石川忠久先生

演題 『近代文人達の漢詩―新島襄・永井荷風・芥川龍之介など―』

- ・出 席 開催案内(四月初旬発送予定)に同封した返信はがきにて四月末まで
- 懇親会も出席の方は同封の振込用紙で年度会費と一緒に振込込み願います。

●春の研修会

- ・期 日 六月四日(水)・十日(火)・二十四日(火)のいずれか希望日
- ・時 間 いずれの日も午後一時から五時
- ・場 所 いずれの日も神奈川近代文学館
- ・参加申込 総会開催案内に同封する返信はがきにて(詳細ははがき書面で案内)
- ・詩稿締切 五月中旬(予定)

編集後記

◆会報15号は24頁と過去最大のボリュームになった。石川先生の講演録を今までのようにカットせず全文(後半部分)掲載したことにもよるが、開催行事が多くてその関連記事が増えた事と、皆さんの積極的な投稿が増えたことによる所が大きい。編集担当としては大変だが誠に喜ばしい現象で、今後ともこの流れを大事にしていきたいと願っている。

◆最近の投稿のもう一つの特徴は手書き原稿が少なくなりパソコン(PC)入力原稿が増えた事である。会員の年代が少し若返ってきたことによるのであろう。この傾向は作詩の段階にまで及んでいて、最近ではPCで作詩をする人が着実に増えている。難しい旧字もそのほとんどはPCで簡単に検索できるし、旧字になじみが少ない世代の人にとっては辞書の小さな字を虫眼鏡で確認するよりはるかに容易に作詩が可能で、且つ推敲も楽である。又、昔の詩の調査などもPCで簡単に出来る。このように今までもおよそ関係が無いと思われてきた漢詩とPCが何時の間にか密接に結びついてきているのは驚きである。しかし、PCに頼りすぎると「漢字が読めるけれども書けない」という人が増えてくるといふ弊害もあるので、今後の大きな課題になつてくるであろう。

◆連載記事「漢詩と私」は今回は都合により休みます。

(川上／中島／三村／吉岡記)